琉球大学学術リポジトリ

学生ー教官間の授業に対する意識の相違に関する研究

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学大学教育センター
	公開日: 2018-08-15
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 西本, 裕輝
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/42274

学生－教官間の授業に対する意識の相違に関する研究

大学教育センター講師　　西　本　裕　輝

はじめに

本稿では、琉球大学の共通教育における授業に対する意識について、実証的データを用いて学生－教官間の意識の差に注目しながら、今後の望ましい授業のあり方について考察することを目的としている。

周知のように、現在、大学を取り巻く社会的状況は非常に厳しいものである。琉球大学も例外ではなく、その時代的要請の中で、自己点検・自己評価は当然のこととして、大学評価・学位授与機構や第三者による外部評価をも念頭に入れて大学改革に取り組まなければならない状況にあると言える。また、その中で特に問われてくるのが「教育をどうするか」ということであろう。

現在、大学教育センターでも、大学評価・学位授与機構による共通教育の外部評価を見据えながら準備を進めており、すでに自主的に外部評価者を選定、依頼し、評価報告書の作成に取り組み始めている。そうした流れの一環として、大学教育センターでは、必要なデータを収集することを目的として、すでに「学生の共通教育に対する意識調査」「教官の共通教育に対する意識調査」と題した二つの調査を実施している。本稿では、そこで収集された調査データの一部を用いて、琉球大学の共通教育への取り組みに関して現状を把握するとともに、今後の対応策を講じる手がかりの一つを得ることを目指したい。

なお、ここでは「教官」と「教員」という二つの表現を用いるが、「教官」と言った場合、琉球大学の専任の講師、助教授、教授のことを指し、非常勤講師と「教官」の両方を含めた場合を「教員」と言っている。

1．調査の概要

本稿では、「学生の共通教育に対する意識調査」「教官の共通教育に対する意識調査」という二つの調査から得られたデータを用いるということはすでに述べたが、ここで調査の概要について簡単にふれておきたい。

まず、「学生の共通教育に対する意識調査」は、2000年５月に、琉球大学の１年次学生全員、２年次学生の約半数、合計約2500名を中心的な対象として行われたものである。調査は全員の学生が履修することになっている「総合英語演習Ｉ」「英語講読特演」の時間を利用し、その担当教員に協力を得て実施された。有効回収サンプル数は1946であった。一方、「教官の共通教育に対する意識調査」は、2000年７月に、琉球大学の全教官、約860名を対象として行われた。有効回収サンプル数は343であった。協力いただいた先生方、学生にこの場をかりてお礼を申しあげたい。

調査項目の内容は、共通教育の理念、共通教育への期待、授業への取り組み方等、多岐にわたっている。学生、教官の双方に共通して問うた項目もいくつかある。ここでは、その中から「授業場面で重要な事柄」についての項目を用い、学生と教官の意識のズレを検討したい。

なお、具体的質問項目に関しては、次の因子分析表を参照いただきたい。

2．授業場面において重要な事柄に関する因子分析結果

学生調査の問13、教官調査の問８に「授業場面で重要な事柄」を問う項目がある。計13項目からなるが、それぞれ「とても重要」～「まったく重要でない」の４件法で測定されている。

13項目それぞれの得点を、学生、教官で比較し

てもよいのであるが、それではかえって煩雑な分析となってしまうことが多い。細かく結果を解釈しようとして部分的な結果の解釈に放浪され、結局全体として何が明らかになったのかわからないままとなってしまう危険性もある。そこでここでは、その後の解釈を容易にするために情報を縮約しておきたい。そうした場合によく用いられる統計分析が因子分析である。

因子分析は、心理学や社会学等でよく用いられる多変量解析の一つであるが、端的に言うと、観測変数の情報を圧縮し、潜在変数である因子を明らかにする分析であり、もっとわかりやすく言うと、似たもの同士でグループを作る分析である。

表1は13項目に因子分析を行った結果である。分析では3つの因子を抽出した。

因子1は、「暖かく親切な人柄である」「学生の立場になって考える」「ユーモアのセンスを持っている」「授業内容がわかりやすい」「授業の内容が役に立つ」といった、教員のパーソナリティや学生のニーズに応えようとする態度を示す項目からなっている。そこでこれを「学生中心型」と命名した。

因子2は、「授業に熱心に取り組む」「授業の準備が周到である」「授業内容への造詣（ぞうけい）が深い」といった、授業に対して熱心に取り組む態度を示す項目からなっている。そこでこれを「授業中心型」と命名した。

因子3は寄与率が10%を切っているので、解釈するのはあまり望ましくないが、あえて命名するとすれば「授業における工夫」と言うことができるだろう。

今後の分析では、ここで得られた因子得点を用いる。

表1　授業場面において重要な事柄に関する因子分析（バリマックス回転）

	因子1 学生中心型	因子2 授業中心型	因子3 授業における工夫
暖かく親切な人柄である	0.779	0.017	0.196
学生の立場になって考える	0.702	0.117	0.161
ユーモアのセンスを持っている	0.634	0064	0.189
授業内容がわかりやすい	0.500	0.253	0.056
授業の内容が役に立つ	0.485	0.209	0.085
授業に熱心に取り組む	0.210	0.669	0.162
授業に準備が周到である	0.081	0638	0.175
授業内容への造詣（ぞうけい）が深い	0.038	0.617	0.119
学生の質問や意見に関心を持つ	0.297	0.580	0.247
小集団討議を導入している	0.013	0.216	0.591
視聴覚機器の活用に精通している	0.200	0.119	0.490
授業以外の場における接触	0.353	0.066	0.485
倫理観を身につけている	0.150	0.293	0.432
固有値	2.315	1.848	1.254
寄与率（%）	17.808	14.217	9.643
累積寄与率（%）	17.808	32.025	41.669

注）因子負荷量は、絶対値が .450以上のものを採用した。

3．学生と教官の意識の差

ここでは、先ほどの項目をどの程度重視しているかについて、学生－教官間の比較をとおして明らかにしていきたい。先ほど得られた因子得点を用いてt検定を行った結果が、次の表2である。

t検定とは2群の母平均値の差の検定とも言い、2つの集団間の平均値を比較する分析である。

例えば、表2の「学生中心型」について見てみよう。平均値のところを見ると、学生の平均値が0.129、教官の平均値が-0.734となっている。因子

表2　学生と教官の意義の差（t検定）

		N	平均値	標準偏差	確率
学生中心型	学生	1906	.129	.826	**
	教官	315	−.734	.871	
授業中心型	学生	1906	−.101	.837	**
	教官	315	.553	.663	
授業における工夫	学生	1906	−.002	.753	
	教官	315	.002	.709	n.s.

得点は平均が0になるように標準化された値であり、0から離れるほど平均から離れていることを示す。また、この場合、因子得点が高くなるほど「学生中心」的傾向を示し、低くなるほどそうではないことを示す。したがって、「学生中心型」項目については、教官よりも学生の方が、より重視していると解釈できる。

表2の右側に確率として**という星印がついているが、これを統計学の用語でアステリスクと言い、統計学的に有意であるということを示す（この場合、1％水準で有意）。有意な結果とは、簡単に言えば、偶然の結果ではないということを示し、次に同様の調査を行ったとしてもやはり同様の結果が得られる、それほど信頼のできる結果であることを示している。

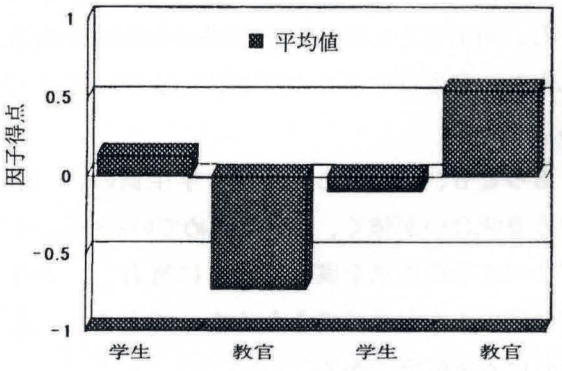
以上のように「授業中心型」についても見てみよう。先ほどとは逆に、ここでは学生の平均値の方が教官の平均値よりも低くなっている。また統計的にも有意である。つまり、相対的に見て、「授業に熱心に取り組む」ことや「授業の準備が周到である」ということなどは、教官の側は重要であると捉えているが、学生の方は教官ほど重要であるとは見なしていないということが示されている。

なお、「授業における工夫」については有意な結果が得られなかったので解釈しない（n.s.）。

これらの結果を、さらに視覚的にわかりやすく示したものが次の図1と図2である。

左から、因子1（学生中心型）の学生の得点、教官の得点、因子2（授業中心型）の学生の得点、教官の得点である。この図を見ても、因子1においては教官よりも学生の得点が高く、因子2においては、教官よりも学生の得点が低いことが明らかになる。

図1　学生と教官の意識の差（t検定）



因子1・因子2

4．考察

以上の結果を要約すると次のようになる。

第一に、「学生中心型」の項目、すなわち「暖かく親切な人柄である」「学生の立場になって考える」「ユーモアのセンスを持っている」「授業内容がわかりやすい」「授業の内容が役に立つ」といったものは、相対的に見て、教官よりも学生の方が重視している。

第二に、「授業中心型」の項目、すなわち「授業に熱心に取り組む」「授業の準備が周到である」「授業内容への造詣が深い」といったものは、相対的に見て、学生よりも教官の方が重視している。

第三に、これらのことから、学生−教官間のギャップ（特に学生側のニーズ）という視点から見れば、「よい大学の授業」として教員に求められるものは、教員が熱心に授業に取り組んだり、準備を周到にこなしたり、専門知識を多く持っていたりするこ

とよりもむしろ、教員が親しみやすく思いやりのあるパーソナリティを有していたり、授業中に笑いを起こすようなセンスを持っていたり、わかりやすく役に立つ授業をすることであるということである。

以上の結果は授業に熱心に取り組んでいると自覚している教官にとってはシビアなものかもしれない。学生のためによかれと思ってやっていることが、必ずしも学生のためになっていない可能性を示唆するものだからである。準備を一生懸命して、内容をこなすことだけに没頭するあまり、ついつい学生の表情が見えなくなり、冗談を言う余裕もなく授業が終わる。そうした経験はおそらく授業を担当した者であれば誰でも持っているだろうし、同業者としては充分に同情の余地がある。しかし、学生はそうした授業を望まないようである。

もっとも、これはあくまでも学生側のニーズという意味合いが強く、学生が求めているからといってすべてその要求を満たすように努力し、かえって学問の水準が維持できなくなってしまうことになれば本末転倒である。

最近、学生による授業評価においてもよく指摘されることであるが、そもそも学生に授業を正当に評価できるのかといった問題がある。欠席の多い学生ほど、また後ろの方に座って内職をしている学生ほど、「言っている意味がわからない」「声が聞き取りにくい」など、授業評価が厳しくなる傾向があることは、各大学の自己評価報告書で指摘されていることである。学生の主張だけに迎合する必要はないということは確かに言える。

授業の内容が直接役立つものでなくても、あるいは難しいことであっても、最低限学生に伝えなければならないこともあるであろうし、授業で扱うものが冗談を言って笑いをとるような内容であるとは限らないし、そうした時間的余裕もあるとは限らない。

しかしだからと言って、そうしたニーズをまったく無視してよいのかというと、それも違うように思われる。今後、教員側の態度として必要となってくるのは、これ以上は譲れないというある一線を定めたうえで、学生の声に耳を傾けることではないだろうか。ここではそうした立場に立って、もう少し論を進めていくことにする。

先ほどから、「相対的」という表現を用いているので、次にその点についてふれたい。これまでの記述から、あたかも教員にとって「学生中心型」の態度が重要で「授業中心型」の態度は重要でないということをデータから指摘しているように誤解されているかもしれないが、決してそのようなことを述べているわけではない。どちらの態度も重要なものであると言える。ただ学生と教官の意識を比較してみると、どちらかというと「学生中心型」の態度を学生が重視する傾向にあり、教官は学生に比べると軽視する傾向にある、「授業中心型」の態度を教官が重視する傾向にあり、学生は教官に比べると軽視する傾向にあるということを指摘しているのである。そのような意味で、相対的という表現を用いているのであって、決してどちらか一方だけが重要であるということは意味していない（もっとも、これら両方を重視しない教官がいるとすれば、それはそれで問題ではあろうが）。

そうしたことをふまえて結論的なことを言えば、大学教員にとって相対的に重要なのは、授業中心的態度ではなく、学生中心的態度の方であるということである。もちろん、両方とも身につけているにこしたことはない。両方とも身につけようとしない教員は論外である。ただ、どちらを先に身につけた方がよいかという話になれば、学生中心的態度の方であろう。いわば、学生中心的態度は授業中心的態度の十分条件とでも言えるのではないだろうか。つまり、学生中心的態度を身につけていてこそ、それが基盤となって授業中心的態度が生かされてくるという関係になっているのではないだろうか。

極端な例かもしれないが、学生中心的態度をまったく無視した、授業中心型の教員がいたとする。確かに授業の準備は周到にやり、知識も豊富かもしれない。しかしながら、準備してきた十数枚の

プリントを授業で学生に配り、ただひたすら下を向いてボソボソとそれらを説明し、学生が理解しようがしまいが、居眠りしようが私語をしようがおかまいなしに、授業を進める教員がいたとしたらどうだろうか。おそらく学生にとっては、たとえその授業が一定の学問水準を満たしていなかったとしても、わかりやすくて役に立つ内容をユーモアを交えながら説明する教員の授業の方が望ましいと思われる。

繰り返しになるが、授業評価などを通して教育改革を行っている昨今の状況を鑑みると、今回の結果は、今後、教員側の態度として必要となってくるのは、これ以上は譲れないという学問上のある一線を定めたうえで、学生の声に耳を傾け、可能な限り改善の努力を行うことであるということを示唆するデータではないだろうか。